

尾崎士郎記念館企画展

生家辰巳屋と三等郵便局

- 小説に描かれた横須賀村 - 特集

平成21年1月20日～7月26日



『人生劇場 青春篇』挿絵原画 中川一政 画

深夜辰巳屋でピストルを発射する瓢太郎。

『人生劇場』は「都新聞」（現東京新聞）に昭和8年3月から5か月間連載された。

開催にあたって

士郎の生れた幡豆郡横須賀村は、江戸時代から街道沿いに商家が連なる景観を呈した小さな村でした。その中でも士郎の生家辰巳屋は、煙草の製造あるいは木綿問屋などで財を成した商家で、士郎が生れた明治31年には、父嘉三郎が自宅で三等郵便局を開業していました。

父が亡くなった後は、長兄の重郎が郵便局長を継ぎますが、父の代からの公金横領を苦しめてピストル自殺をしてしまいます。この時士郎は、早稲田大学在学中でした。尾崎家は、家屋敷を借財返済のために手放し、横須賀村から離れることになります。このできごとは、代表作『人生劇場 青春篇』をはじめ多数の作品に取り上げられ、士郎の作家人生にも大きな影響を与えました。

今回の企画展では、天野家より新たに寄贈をいただいた兄重郎の遺書のほか、故郷横須賀村に関わる資料や作品を集め、士郎の故郷への思いをご紹介します。

『人生劇場』と辰巳屋

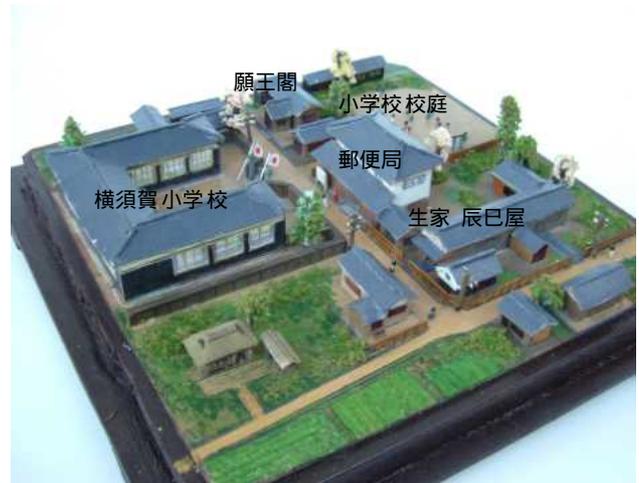
自らの半生を題材とした代表作『人生劇場 青春篇』では、生家辰巳屋が重要な舞台として描かれています。主人公の青成瓢吉が、父瓢太郎に命じられ、裏庭の銀杏の大木に登り、村々を眺める場面は、瓢吉の成長を示す描写として映画でも必ず登場します。

小説『人生劇場』では、父瓢太郎となっていますが、現実には長兄の重郎がピストル自殺をしています。

30年ぶりの帰郷

大正7年、士郎は20歳で辰巳屋の没落によって実家を失います。その後、東京馬込界隈に居を構え、戦時中には静岡県伊東に疎開し、戦後もしばらく伊東で生活をしていました。小説家として成功を収めてからも、兄の公金横領を理由として故郷を離れたことから、横須賀村に帰ることは、ずいぶん心苦しかったようです。

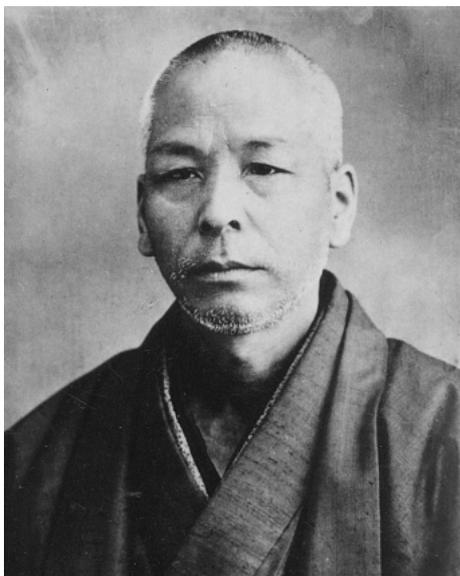
昭和22年4月、49歳になった士郎は約30年ぶりの帰郷を果たします。横須賀村では、村民から熱烈な歓迎を受け、小学校の同級生らと感動の再会を果たします。これを機に、地元の有力者や同級生らが「瓢山会」を結成し、帰省した際の宿舎として「瓢山荘」が建設されました。以後、時に作家仲間をともなって、年に数回は帰郷し旧交を温めました。



辰巳屋と横須賀小学校模型 烏山龍雄氏製作
当時の横須賀小学校は、辰巳屋の向かいにあった。士郎は始業の鐘が鳴ると用具を裸のまま持って登校し、昼食や便所は自宅に戻り、先生にしかられると家にすぐ帰ってしまったという。



横須賀の町を歩く士郎
写真は昭和30年に雑誌取材をかねて帰郷した際のもの。



士郎の父嘉三郎

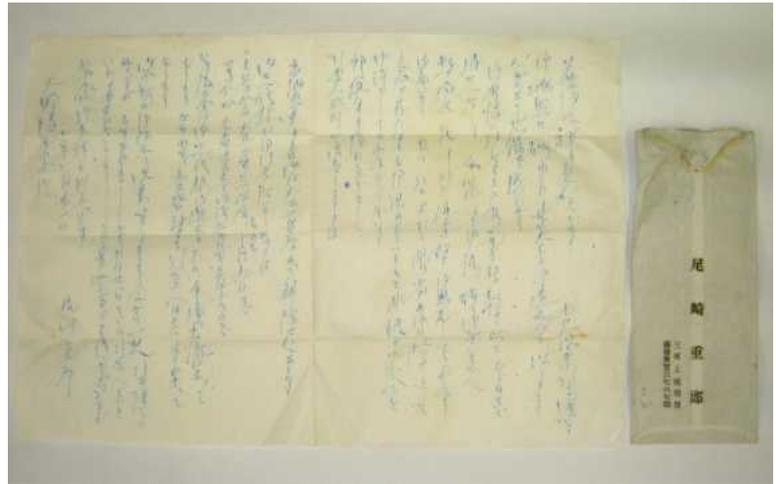


旧横須賀郵便局 平成14年撮影
辰巳屋の屋敷は他人の所有となり、戦後は歯科医院となっていた。

横須賀郵便局と河内屋天野家

横須賀村で辰巳屋とともに、裕福な商家であった天野家(河内屋)は、代々清兵衛を名乗る旧家でした。小牧陣屋の役人の家に生まれ、天野家に婿入りした5代目清兵衛は、明治29年に幡豆製糸株式会社を設立し実業家として成功する一方、漢詩や和歌を好む文人でもありました。

明治20年、土郎の父嘉三郎が自宅に三等郵便局を開設する際には、保証人を引き受けるなど、町の旦那衆として尾崎家とは公私ともに深い付き合いがありました。



天野清兵衛あて兄重郎遺書 大正7年6月21日付け
清兵衛への迷惑を詫びるとともに、前年の5代清兵衛の死去に伴い、襲名した際に郵便局の引受人(連帯保証人)の手続きが不備となっており、負債の責任が天野家には及ばない旨を説明している。なお、重郎は6月22日7時に死亡が確認されているので、本遺書は前夜に書かれたものである。

作品に描かれた横須賀村

土郎が初めて辰巳屋や故郷横須賀村を題材にした小説は、小説家を志して間もない25歳で発表した「短銃」(のちに改作し「三等郵便局」)です。昭和8年35歳の時に、小学生から青年期までの半生をもとに構想した『人生劇場 青春篇』を発表し、作家として不動の地位を得ることになります。まさに、波乱万丈の人生が小説家尾崎士郎を生んだことができます。

また、昭和22年の30年ぶりの帰郷を機に、横須賀村を題材にした「瓢山河」「兄の恋人」「厭世立志伝」などの作品を残しています。



性覚尼と士郎 願王閣(通称地蔵堂)にて 昭和30年
土郎の祖父の妹が、辰巳屋に隣接して開いた尼寺。土郎は帰郷するとしばしば少年時代から馴染みの地蔵堂へ性覚を訪ねた。当時性覚は90歳を過ぎる。現在も土郎の父母の写真が祀られている。



士郎の兄弟 大正3年 士郎16歳
左:長男重郎 中央:士郎 右:二男昇
二男の昇は重郎の自殺の後、差し押さえられた自宅を処分し、東京へ移った。後に毎日新聞社に勤務し、『サンデー毎日』の編集長を務めた。

横須賀村を描いた主な作品

	作品名	初出	掲載書籍	備考
1	三等郵便局	大15.8『新潮』	平凡社選集 巻9 昭16 『秋風と母』日東出版 昭21 講談社全集 第6巻 昭41	
2	人生劇場 青春篇	昭8.3～都新聞連載	角川文庫 平20.12ほか多数	望郷篇などでも吉良が登場
3	瓢山河	昭22.7～23.2中部日本新聞	『中村遊郭』文藝春秋 昭31 講談社全集 第5巻 昭41	
5	兄の恋人	昭26.5『別冊小説新潮』	『中村遊郭』文藝春秋 昭31	
4	瓢さんの初恋	昭28.9『別冊小説新潮』	『瓢さんの初恋』河出書房 昭30 講談社全集 第5巻 昭41	
6	厭世立志伝		『厭世立志伝』中央公論 昭32 講談社全集 第2巻 昭40	
7	作家故郷へ行く・岡崎から吉良まで		昭30.8『小説新潮』	雑誌特集記事・エッセー
8	瓢山会の構想		『瓢山会雑誌』第1巻	「故郷すなはち私である」

平凡社選集：『尾崎士郎選集』平凡社 講談社全集『尾崎士郎全集』講談社

展示品リスト（上記の横須賀村掲載作品を除く）

	資料名	年代	備考
1	「人生劇場 青春篇」 初版本	昭和10年3月	竹村書店発行
2	「人生劇場 青春篇」挿絵原画（ピストルを発射する瓢太郎）	昭和8年3月～7月	中川一政筆
3	「人生劇場 青春篇」挿絵原画（辰巳屋帳場…算盤はじく瓢太郎）	昭和8年3月～7月	中川一政筆
4	模型「辰巳屋と横須賀小学校」	明治30年代	鳥山龍雄氏製作
5	映画写真「人生劇場」	昭和33年	東宝 監督 杉江敏男
6	旧横須賀郵便局写真	平成14年	解体され現存せず
7	渡辺玄一氏に宛てた手紙	昭和22年8月8日付	小学校同級生、s22当時横小校長
8	性覚尼に宛てた手紙	昭和22年12月26日付	90歳を超えた老尼のため大きな文字
9	写真「横須賀の町を歩く土郎さん」	昭和30年	小説新潮取材のため
10	御請書	明治20年3月	横須賀郵便局開設時の書類
11	身元引請承諾書・財産調書・保証書	明治20年1月	郵便局開設のため天野清兵衛が提出した
12	委任状	大正5年10月10日	天野清兵衛あて。嘉三郎死去の際
13	天野清兵衛宛 嘉三郎文書		「上横須賀郵便局」罫紙使用
14	天野清兵衛宛 重郎遺書	大正7年6月21日付	死の直前に書かれたもの
15	写真「父 尾崎嘉三郎」		
16	写真「土郎さんの兄弟」	大正3年	
17	写真「天野清兵衛」		『吉良の人物史』より
18	赤絵急須	大正5年10月10日	母よねの形見で辰巳屋唯一の遺品